

事業活動実績報告書

施設名	幼保連携型認定こども園そあ
教育理念	1人ひとりが主役になる教育保育 自然の中で全身を使って五感を育む・時間を忘れて遊ぶ・赤ちゃんからお年寄りまで関わり合う生活・ほんものの食事
事業の区分 (5領域)	健康・人間関係・環境・言葉・表現
1 事業名	心と体を育む園庭環境
2 実施期間	令和5年 4月 1日 ~ 令和 6年 3月31日

3 取組概要	<p>(取組日) 令和5年 4月 1日 ~ 令和6年 3月 31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>ムシムシクラブでは園庭の生態系調査を行なってもらっている地域の虫博士を呼び、虫の持ち方や体の仕組みを教えてください。虫の持ち方は、自然遊びの基本の一つ。この経験が自然の中で生かされることが待ち遠しい。</p>	
	<p>(取組日) 令和5年 4月 1日 ~ 令和6年 3月 31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>「ピザを食べたい」という一言から、僕たちのピザ屋ごっこが始まった。まずはピザの設計図を描いて、工作を始めた。でもやっぱり、本物のピザが食べたいという気持ちが強くなってきた。そして子どもたちは、「ピザはピザ窯で焼くらしい」という事実に出り着いた。</p> <p>「それならば」と思い立ち、ピザ窯を作る計画を立て始めた。しかし、まずは火を起こす方法を学ばなければならない。そこで、火起こしの練習を始めた。最初の挑戦では、火をつけるのに二日もかかってしまった。あまりにもうまくいかないで、ついに消防署に行き、「火のつけ方を教えてください」と頼んだ。消防署の人は笑いながら、「火の消し方は知っているんだけどね」と言いつつも、親切に教えてくれた。</p> <p>なんとか火をつけることができるようになったけれど、次の問題はピザの具材がないことだった。そこで僕たちは、ピザのトッピングとして椎茸を使うことを思いついた。椎茸を育てるために、楢木を使うことにしたのだ。ピザを焼く頃には、椎茸が育っていることを願って。</p> <p>そしていよいよ、レンガを積んでピザ窯を作る作業に取り掛かった。子どもたちと一緒にレンガを積んだ結果、少し歪んだピザ窯が完成した。それでも、自分たちの手で作り上げたピザ窯を前に、やり切った表情を浮かべていた。</p>	
	<p>(取組日) 令和5年 4月 1日 ~ 令和6年 3月 31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>ピザ窯が完成したのは3月のことだった。そしてついに、待ちに待ったピザを焼く日がやってきた。自分たちのイメージ通りのピザを作るために調べに調べたピザの材料を用意した。小麦粉、チーズ、ソーセージ、ピーマン、それとトマトのやつ。残念ながら椎茸は結局育たなかったけれど、それでも僕たちはワクワクしていた。</p> <p>窯に練習した通りに火をくべ、ピザを焼き始めた。段ボールで作ったピザから、本物の食べられるピザを作るまでに一年もかかったけれど、その苦労があった分だけ、ピザの味は格別だった。</p>	

(取組日) 令和5年 4月 1日 ～ 令和6年 3月 31日

(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること

#### モミ探しの珍道中

今年もお米を作るために、子どもたちはモミから稲の苗を育てることにしました。しかし、すべての苗が枯れてしまい、お米が作れなくなってしまいました。そこで、緊急作戦会議が開かれました。

「土を変えればどうかな？」

「もう一度、籾を植えればいんじゃない？」

様々なアイデアが出ましたが、昨年度の子どもたちから引き継いだ籾はもうすべて使い切ってしまっていました。新しい籾を買いに行くことになったものの、どこで売っているのか誰も知りません。子どもたちは保育教諭に聞いてみましたが、保育教諭も籾の売っている場所を知らず、葛飾区には田んぼが一つもないため、籾が売っているかどうかも怪しいのです。

会議が行き詰まりそうになったとき、一人の子どもが声を上げました。

「〇〇屋にはなんでも売ってるよ！籾も見たよ！」

その言葉に子どもたちは早速、〇〇屋に向かいました。しかし、雨の中戻ってきた子どもたちはしょんぼりしていました。「〇〇屋には籾が売ってなかった。なんでも売ってるわけじゃなかった。」

子どもたちは次の手を考え始めました。そのとき、「〇〇商店さん」というお米さんが苗を置いていることを発見したのです。B君は、登園してすぐにみんなを集めて、メモしてきた話をしました。他の子どもたちは「苗って何？」と不思議そうに聞きます。

「見なきゃわからない！」

そうして、みんなで「〇〇商店」に苗をもらいに行くことになりました。お店に着くと、子どもたちはじっくりと苗を観察しました。お店のお父さんは、苗が成長したら稲になることや、精米したお米を見せてくれました。しかし、子どもたちの中には、苗がどうやってお米になるのかイメージできない子もいました。

「まずは、わからないから育ててみよう！」

子どもたちは、やっと出会えた白米の苗を大事に持って帰りました。例年よりずっと遅い田植えの時期でした。田んぼの中に入り、列になりながら、苦労して手に入れた〇〇商店のお米の苗を植えました。

困難を乗り越えてたどり着いた田植えだから、その楽しさは格別でした。



(取組日) 令和5年 4月 1日 ～ 令和6年 3月 31日

(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること

#### 稲の収穫大作戦

10月の中旬、子どもたちが育てていた稲がついに収穫の時期を迎えました。子どもたちはどうやって収穫するのか話し合い始めました。

「私知ってる！稲を引っっこ抜くんだよ」とFちゃんが教えてくれました。しかし、いくら引っ張っても根が強く抜けません。一人では無理だと思い、友だちにも手伝ってもらいましたが、それでも稲は抜けませんでした。

「スコップが必要だ！」と誰かが叫び、今度はスコップで掘る人も加わり、みんなで力を合わせました。そして、ついに稲を抜くことができました。子どもたちは大喜びです。しかし、まだまだ先は長いです。この日は四束の稲を抜くことができました。

その後、G君は年長児に、稲を抜いて収穫したことを話しました。年長児は真剣な顔で言いました。「稲は鎌で刈るものだよ。」G君は「ちがう方法があったのか！」と目を丸くして驚きました。

次の日、子どもたちは鎌を使って稲刈りに挑戦することにしました。初めて鎌を持つG君は、緊張した表情でゆっくりと刈ろうとしましたが、なかなか稲は切れません。「稲って固いなあ」と呟きながら何度も挑戦していると、次第にコツを掴み、自分で刈れるようになりました。

できるようになると楽しくなり、G君は稲を見て「これは大物だ、あれは小物だから簡単だ」と、片手でつかめるくらいの稲だと簡単で、いっぱいだと難しいということも発見していました。



3 取組概要

<p>(取組日) 令和5年 4月 1日 ~ 令和6年 3月 31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>田んぼと生き物の住処 子どもたちは、水の中の生き物を見たり、触ったり、匂いを嗅いだりする体験を通して、圃にあるお米と生き物の住処である田んぼについて考えるようになりました。</p> <p>田んぼには、たくさんの生き物が住んでいます。でも、米作りにはどうしても落水という工程が必要です。落水をすると、水がなくなってしまう、そこに生息していた生き物たちは死んでしまいます。子どもたちは、この問題について話し合いました。そして、田んぼのほかに生き物が住めるように池を作ることに決めました。</p> <p>しかし、スコップで掘るのは時間がかかります。そこで、ショベルカーを使うことにしました。ショベルカーを運転できる人を探してみると、先生たちの中に運転できる先生がいました。「こんなに近くでショベルカーを見るのは初めてだね」と子どもたちは興奮しました。</p> <p>ショベルカーの大きな腕が動くたびに、子どもたちは目を見張りました。「私の手よりずっと大きい。全然手が足りない！」と驚く子もいました。</p> <p>その場に一緒にいた3歳児のI君と5歳児のJ君は、ショベルカーのクローラーの大きさに注目しました。J君はI君に「近くで見ると相当大きいぞ。これが回るんだよ」と話しました。I君は頷きながら、真剣な表情でしばらく眺めていました。</p>	
---	---

<p>(取組日) 令和5年 4月 1日 ~ 令和6年 3月 31日</p> <p>(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること</p> <p>ショベルカーで地面を掘ったので、次は池の形作りをすることにしました。4歳児のN君と5歳児のOちゃんは、デコボコになった地面をスコップで整え始めました。Oちゃんは、「これは終わらないから急いでやらなきゃ。N君、反対側から掘ってって」と言いました。N君も「わかった！ やってやるぞー！」と生き生きとした表情で穴を掘り進めていきます。</p> <p>わからないことは職人さんに聞きながら、二人は地面を平らにしていきました。やっていくうちに、スコップの使い方にも慣れ、腰の入れ方はすでに職人のようでした。今日は、穴を掘ったときに出てきた石や瓦礫を集めることにしました。3歳児のPちゃんは職人さんに「なんでこんなにたくさん石が出てくるの？」と尋ねました。職人さんは、「泥は固まって石になることもあるし、土砂が流されてくることもあるからだよ」と教えてくれました。Pちゃんは「そうなんだ」と頷きながら、石を拾い続けました。</p> <p>次第に、子どもたちは誰が石をたくさん運んだか、誰が大きな石を見つけられるかと競い合い、石集めを遊びに変えました。集まった石たちはとても重く、運ぶのに一苦労でしたが、子どもたちは楽しそうに作業を続けました。</p>	
--	--

効果検証報告書

施設名	社会福祉法人砂原母の会 幼保連携型認定こども園そあ
教育理念	1人ひとりが主役になる教育保育 自然の中で全身を使って五感を育む・時間を忘れて遊ぶ・赤ちゃんからお年寄りまで 関わり合う生活・ほんものの食事

事業の区分(5領域)	健康・人間関係・環境・言葉・表現
1 事業名	心と体を育む園庭環境
2 事業概要	現在井戸、水路、田んぼを中心にビオトープの環境があり、昆虫や、水辺の生き物の観察、稲作など、都会の中では中々経験できない体験の機会を提供し、講師を招いて生き物について教えてもらったり、収穫した野菜を園庭で調理したりすることにより、ビオトープや田んぼで体験したことが学びになる取り組みを行う。

計画時	3 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況  “建築士(主幹教諭、用務) ・保育、園児指導(幼児クラス担任、散歩見守り職員)・外部講師(カワセミの里自然観察員、環境カウンセラーとして葛飾区生物多様性推進協議会委員、緑化推進協力員、3R推進パートナー、地球温暖化対策推進協議会委員、消費生活審議委員、環境省臨時審議委員在籍 ・野外救急救命国際資格ILCOR準拠Adult Child Infant CPR+AED(ウィルダネスジャパン)の受講(今後、全職員受講予定)・大学院在学中の職員・ユンボ資格取得者・国際MFAインストラクター資格者”
	事業後 3についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等  法人内・地域等の関係を活用することにより、大人側に幅広い専門性が確保できたことで、子ども自身の興味を広げることが可能になった。また、常に保育者がスマートフォンを保持し、写真や映像を残すことで、子どもの姿の共有が容易になり保育者側の振り返りの質が上がった。振り返りの質が上がったことで、より具体的に子どもたちの興味や関心を探ることができる体制を作ることが可能となった。

計画時	4 事業のねらい	園庭の自然環境を整備して、園児が法人の教育理念に掲げた4つの柱を「自然の中で全身を使い五感を育む」「時間を忘れて遊ぶ」「赤ちゃんからお年寄りまで関わりあう生活」「ほんものの食事」を体験できるようにする。 ・園児が様々な体験を通して、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿及び、生きる力の基礎を育む。
	事業後 4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等  今年度の活動実績報告書にも記載した一部の活動において、「ソニー教育財団:優良園」「生態系協会:学校・園庭ビオトープ賞」「食育コンクール:優秀園」を受賞した。これらの受賞は、単に外部からの表彰を意味するだけではなく、当園が長年にわたり構築してきた保育理念と、それを具現化するための保育・教育の内容の努力が、幅広い分野で社会的に認知され、一定の高い評価がされたと考えている。

5 取組の内容	<p>計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4月から3月カワセミの里自然観察員による自然観察、遊び指導、むしむしクラブ、川遊び</li> <li>・自然観察員やボランティアの人たちより、生き物についての知識を遊びを通して学ぶことにより、これまでの園庭や水元公園で体験したことを知識として子どもたちが触れる機会を作る。</li> <li>・12月オンライン漁業体験</li> <li>・11月から3月油庫解体撤去(葛飾区)</li> <li>・4月から～翌年3月まで ビオトープでの活動とビオトープの保全、ワークショップ</li> <li>・4月から～翌年3月まで パン窯でのワークショップ</li> </ul>
事業後 5についての 効果・検証	<p>事業実績から推測される効果や改善点等</p> <hr/> <p>子ども理解の向上が、子どもたちの興味関心を広げ、さまざまな活動へと繋がる要因となった。これまで継続してきた活動と、そこから派生して広がった新たな取り組みは、質の高い保育教育活動に寄与している。今年度の活動は、来年度や再来年度に向けて子どもたちの間で伝承され、数年先まで子どもたちの経験として蓄積されると考えられる。これらの過程は、子どもたち一人ひとりの興味を引き出し、それに応じた教育活動を提供することで、自ら学び、成長する機会を増やすことを目的としている。取り組みは、知識の伝達に留まらず、子どもたちが自分の興味に基づいて探求し、新たな発見を重ねる過程を重視している。これにより、学びはより深く、子どもたちの経験として長く蓄積されていく。こうしたことから、これまでの活動から派生した新たな取り組みは、子どもたちの学びをさらに豊かにし、自然とのふれあいから始まった活動が地域社会との連携や科学的な探求へと広がるなど、学びの範囲は次第に拡大している。これにより、一つの活動が次の学びへとつながり、子どもたちの経験を通じて全人的な成長を促している。</p> <p>この活動が子どもたちにとって意味のある経験となり、数年先までその成長に影響を与え続けることが期待され、子どもたちが社会で自立して行動するための基盤となり、彼らの人生において重要な役割を果たすと考えている。今後も、子どもたちの興味や関心を引き出し、彼らの可能性を最大限に引き出すための活動を継続していきたい。</p>
事業後 環境構成に ついての 効果・検証	<p>事業実績から推測される効果や改善点等</p> <hr/> <p>水元公園に対する東京都の年間約4億円の投資(都立公園等指定管理者評価委員会令和4年度「防災公園グループ」事業報告概要書(公表版)を参照)は、環境を構成するためには莫大な費用が必要であることを示している。この事例は、公共施設だけでなく、教育施設の環境整備においても同様のことが言える。今回の事業活動により園庭や室内の環境を幅広い意味で整えることが可能となり、子どもたちを取り巻く人的環境及び物的環境の質が向上した。この向上が、教育や保育の質の高さを担保する要因となったと考えられる。これらの事業活動は、施設の改善や安全性の向上に直接寄与するだけでなく、子どもたちの学習意欲の喚起や健全な育成、全体的な福祉の向上に間接的に影響を及ぼすと考えられる。人的環境の質の向上は、子どもたちが安心して学び、成長できる関係性の構築に貢献し、物的環境の改善は、学びや遊びのための刺激的で安全な空間を提供し、子どもたちの様々な発達段階に対応した教育活動を支援することができる。高い質の環境が提供されることで、子どもたちはより良い学習成果を達成し、社会的スキルを発展させ、心身の健全な発達を促すことが可能となった。</p>
7 期待される効果 児童の姿	<p>取組を通じて期待される児童の姿や効果等</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> <li>・やってみたいこと、少し難しいことを実現するために、方法を考えて、実行することを繰り返し、成功するためにはどうしたらよいか失敗から学び、考える力を身に付け、自分自身に自信を持つ。</li> <li>・園庭ビオトープや水元公園で、色々な事前環境や動植物に触れることにより、生命について関心を持ち、いたわる気持ち、大切な気持ちが芽生える。</li> <li>・不思議に思ったこと、発見したことを友達や職員と調べたり、共感することにより、より豊かな人間関係を築く。その中で友達と分け合ったり、数えたりすることから数、数量に関心を持ち、図鑑や本で調べることにより文字に関心を持つ。</li> <li>・自然と関わることにより、身の回りの危険に気付き、回避できるようになる。友達と教え合い、安全に気を付けるようになる。</li> <li>・体験をしたことを言葉や絵、工作、又は全身を使うなど、様々な方法で表現することができる。</li> </ul>

事業後	7についての効果・検証	<p>事業実績から推測される効果や改善点等</p> <p>子どもたちがやってみたくことや少し難しいことに挑戦し、方法を考え実行する過程では、失敗から学び、成功への道を模索する重要な経験を積む。この一連の過程を通じて、考える力が養われ、自己効力感や自信が高まったと考えている。また、園庭ビオトープや水元公園での自然体験は、子どもたちに生命への関心を喚起し、生き物をいたわる心や大切にすることを育む基盤となった。また、不思議に思ったことや新たな発見を友達や職員と共に調べ、共感を共有する活動は、子どもたちの社会性を育み、豊かな人間関係の構築に寄与する。この過程で数や数量、文字への関心が自然と高まり、学習への興味や意欲を促進し、自然とのふれあいは、身の回りの危険に対する意識を高め、安全に行動するための知恵を子どもたちが互いに教え合う場を提供することに繋がった。</p> <p>こうした、体験したことを様々な形で表現する能力は、子どもたちの創造性と表現力を豊かにし、感情や思考を外部に伝えるための多様な方法を身につけることができる。これらの経験は、子どもたちの認知的、社会的、感情的な発達を支え、豊かな学びの環境を提供し、結果として、子どもたちは多角的な視点を持ち、自己と他者、そして自然環境との関わり方を深めることができたと考えている。</p>
-----	-------------	---

8 効果検証総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて	<p>本年度の取り組みを通じて、子どもたちの成長に注目した活動が多岐にわたり展開することができた。特に、スマートフォンといった便利な道具と、田んぼの活動のような昔を体験する活動の両方を行えたことで、子どもたち自身が挑戦することへの意欲を育む過程で、失敗から学び、成功への道を模索する一連の過程は、子どもたちに考える力を養い、自己効力感や自信を高める機会となった。こうした現代と昔の両方のバランスが取れた活動によって、子どもたちが自身の限界に挑み、それを超える体験を通じて、自己成長の価値を実感する基盤が築かれた。加えて、園庭ビオトープや水元公園での自然体験が、子どもたちの生命への関心を深めるきっかけとなり、これらの体験を通じて、生き物へのやさしい心や大切にすることを芽生え、子どもたちは自然界との深い結びつきを感じるとともに、環境に対する責任感を感じられるきっかけとなった。また、不思議に思ったことや新たな発見について友達や職員と共に調査し、共感を共有する活動は、子どもたちの社会性を育成し、人間関係の構築に貢献すると同時に、このような探究活動を通じて、数や数量、文字への関心が自然と高まり、子どもたちの学習への意欲が促されたと考えられる。その結果、子どもたちが体験したことを様々な方法で表現する能力は、創造性と表現力の豊かさを示し、感情や思考を外部に伝える多様な方法を身につけることで、子どもたちの認知的、社会的、感情的な発達が促進されたと考えている。これらの成果は、子どもたちが多角的な視点を持ち、自己と他者、そして自然環境との関わり方を深めることに繋がった。環境の整備、専門性の確保、外部との連携、そして継続的な反省と改善が、子どもたちの全人的な成長を支えるために不可欠であることが私たち保育者にとっても再認識された。これらの取り組みが、子どもたちが将来、社会で自立して行動するための基盤を形成し、彼らの人生において重要な役割を果たすことが期待される。今後も、子どもたちの興味や関心を引き出し、彼らの可能性を最大限に引き出す活動を継続することを続けていきたい。</p>
----------	------------------------	--